

2009年6月5日(金曜日) 17-19時

南山大学アジア・太平洋研究センター主催研究会「東南アジアの共産党再考—
『未完に終わった国際協力』(原不二夫著)を読み解く」

原不二夫著『未完に終わった国際協力：マラヤ共産党と兄弟党』(南山大学学
術叢書、風響社、2009年3月刊、302p.)

村嶋英治(早稲大学アジア太平洋研究科、murashim@waseda.jp) 報告

(略歴：1951年5月福岡県生、1974年東大法卒、1974-1991アジア経済
研究所研究職員、1991-1997成蹊大学文学部助教授・教授、1997-現在早稲
田大学アジア太平洋研究科教授、タイ近現代史)

原先生の依頼事項

- 1, 同上著作の批評、
- 2, タイ共産党とマラヤ共産党の比較、
- 3, タイ共産党と東南アジアの共産党間の関係、
- 4, タイ共産党と中国共産党の関係、
- 5, 今、タイ国内ではタイ共産党はどのような歴史的評価を受けているのか、活動が盛んだった頃と違いがあるか、あるとすればどのような点か。

詳細な調査、貴重な研究、研究の欠如同感、タイ共産党と比較して思い当たる所多数
貴重な研究は何語で書かれても価値高く、長期的には翻訳され高く評価される。但し日本
語で書かれた場合、短期的には、本格的な東南アジア研究であればあるほど、読者は限ら
れているという問題。

Project on the Cold War in Southeast Asia by Professor Anthony Reid, Director, Asia
research Institute, National University of Singapore, 2006-

マラヤ共産党とタイ共産党は兄弟党中、最も近い。

共産党の闘争は一世代の事業(10代後半、20代初ではじめ、成功しない場合は老年に
達して止む。1920年頃生れ、1930年代末に共産党の運動に参加、20代後半から
トップリーダー、その地位を維持したまま1980年代の終焉を迎えた。

タイ共産党のマラヤ共産党との類似性、共通性(闘争方針、経験)と相違点

タイ共産党(1930年4月?暹羅共産党、1942年12月1日タイ共産党) (文献①)

*中国で大革命時の活動歴を有する活動家が初期リーダー(伍治之、朱叟林)
朱叟林は戦後タイ共産党スポークスマン、1974年北京で死亡するまで在外党代表

*1930年代ベトナム人のトップリーダー(黄文歡(Hoang Van Hoan)『滄海一粟』1
987年。ベトナム人暹羅共産党員夫妻の子、第3代(最後)タイ共産党総書記 Thong
Chaemsri(竜通剣西 p.85), 第2代タイ共産党総書記ラーオ人とベトナム人のむすこ Charoen
Wangam(陳嘉 p.84) cf. p.129

1920年代末~1930年代末の暹羅(タイ)共産党の資料

*1930年代、タイ政府と植民地政府(英、仏印、蘭印)との共産主義活動に関する情
報交換、駐暹羅オランダ公使、フランス公使、イギリス公使がシャム政府に提供した共産
党情報がある。一部タイ国立公文書館に保存。共産党弾圧で協力。

*華字紙副刊上の共産党員グループ(読書社)の連載、

*1940年からピブーン政権の失地回復運動のため、対仏印、英関係悪化。ピブーン政
権は仏印の共産主義者の解放運動を、愛国者の運動を見なし共闘の道を探る。ベトナム人
共産主義者との間の協力関係できる。「大東亜戦争」時に、タイ国軍に参加したベトナム
人共産主義者の存在(文献②)。1950年朝鮮戦争勃発、冷戦に開始までベトミン、ラ
ーオ・イサラはバンコクで公然と活動。

*1940年、タイ共産党内にもピブーン政権の反英・仏帝国主義政策を評価し、共闘可
能と考える指導者が存在(当時、中国共産党は日本帝国主義の侵略と闘う。同じことはタ
イを侵略したフランスに対しても言えるはず)

*「大東亜戦争」時の武闘(文献③)、(タイで初めての詳細な記録、劉源泓 Chao Phongphichit,
Luk Chin Rak Chat, 週刊 *Matichon*, Bangkok (in Thai) 出版中 (19 Sept. 2008~)
マラヤ共産党の根拠地で訓練(cf. p. 74,

マラヤ(ペナン)で教育を受けたタイ共産党幹部

*楊(プラサート・イオチャーイ)ペナンの鐘霊中学
大東亜戦争前の日中戦争期における南タイの抗日組織の中心人物

政治も
経済も
名内 抗日 後
有後

1939年から41年の間「接着我們又着手將泰南各府的組織聯合組成“泰南抗日聯合會”
發起者是一位從馬來亞檳城鐘靈中學回來的楊君（他的家即在董里府（村嶋注、Trang）他后
來成為泰國進步組織領導人之一）、實際上他就是這個組織的領導人」（《崇實學校》紀
念文集編委會編『崇實學校』、人民交通出版社、1995、p.53）

「大東亞戦争」後、タイ共産党は武闘を止める

「大東亞戦争」後、タイ共産党は武闘をしなかった（マラヤ共産党は1948年6月20
日武闘開始—1954年7月まで pp.21-24、1968年6月17日武闘再開 p.26）。
タイ共産党はこの時期武闘しなかったことに対する批判なし。むしろ評価。武闘をやめ進
歩派の政党（プリーディー派）と協力する方針に転換。進歩派政党の選挙の手伝いもする。
方針転換の結果、労働者、学生に党勢拡大した¹。1946—1950年タイ共産党は合法
政党で、プリーディー派政権（ベトミン、ラーオ・イサラの闘争に同情的）と聯合戦線
を目指す活動。この時期に、高等教育のタイ人がタイ共産党にリクルートされる。それまでは
華人とベトナム人。タイ政府のタイ共産党への弾圧は1950年の朝鮮戦争勃発による冷
戦開始以後。

タイ共産党から主力が中共タイ支部として分離

タイ共産党は、1947年に中共タイ総支部とタイ共産党に分離した。
中共タイ支部所属者の多くは1949年—1953年帰国（帰僑は非難されることはない
cf.p.48 マラヤ共産党では、裏切り者と位置付けられる）（彼らが『泰国帰僑英魂録』全五
巻、1989-2003を出版）、中共タイ支部は1953年廃止²。1949年後、華僑青年の帰国
熱、但しタイ共産党員としての党歴認められず（1930年代末に延安に行ったタイ華僑
は、延安で再入党）（cf.p.59）

又中共支部
正史
カリ版
100頁

少なくとも見かけはタイ人化を図るタイ共産党

1946年からタイ人大学生がタイ共産党に参加（ヌオン・チアもその一人）。それ以前
は華人・ベトナム人（バンコクの華校で1930年代に教育を受けた1920年代生れ、
彼らがタイ共産党を1980年代の消滅まで実権握る）但し、華人系リーダーはできるだ
けタイ人を表に出す（ex.Chareon Wangam 即ち Mit Samanan 総書記1961-1978）。華人系に
比し、タイ人党員の党内昇進は早い。タイ化を図るためタイ人と結婚キャンペーンなど。
Chareon Wangam は、張遠(Wirat Angkathawon 1921-1997 北京で療養中死亡)が飾り物とし
て表に出す³

¹ Interview with Chao Phongphichit on 9 May 2003 in Bangkok.
² Interview with Chao Phongphichit on 9 May 2003 in Bangkok.
³ Interview with Somphon Angkathawon(wife of Wirat) on 21 Aug..2002 in Bangkok

それでも、1976年10月6日弾圧前後にタイ共産党の武力闘争に参加した学生リーダ
ーは実質のトップは、タイ語は片言で、秘密事項は中国語でコミュニケーションする華人幹部
で占められていたので失望

* 1949年以後、北京のマルクスレーニン学院等での訓練 (cf.p.59)

* 1946—1951年6月、バンコクにベトミン政府の海外代表団存在 (Viet Nam
Government Delegation for South East Asia, president は Nguyen Duc Quy) 存在、バ
ンコクからシンガポール、インドなどへ、タイで武器調達、在タイベトナム系住民のベトミ
ン支援・志願兵参加、ラーオ人のラーオ・イサラ支援・志願兵参加(cf.pp.132-133)

マラヤ共産党にはない要素として、タイ共産党はラオス、カンボジアの共産党との関係も
深い（マラヤ共産党との相違点）

*タイ共産党とカンボジア共産党との関係、1950年にタイ共産党に入党したヌオン・
チアの存在（ボルボトに次いでカンボジア共産党No.2）（文献④）

ラオス領、カンボジア領はタイ共産党の聖域
1966—68ラオスのチャンパーサクにタイ共産党の軍事学校
1973年10月14日以後ラオスのシーバンドンに南イサーン地区の軍事学校開く
ボルボト派を追ってベトナム軍が入ってくるまでラオスのチャンパーサクで前線に出ら
れない老人、女性が農耕し、前線にコメを供給⁴

ラーオ化した越僑のラオス支配（タイ化した華僑のタイ支配と同様）
* 2004—05時、ラオスの国会議長、現在ラオス人民革命党政治局員 Saman Vinhaket (サ
マーン・ウィニャケート)、党内最有力者はタイのピチット県で訓練を受けたベトナム人。

ベトナムでの軍事訓練

1976年—78年時、タイ共産党の青年400人、ハノイの士官学校で訓練うける⁵

タイ共産党とインドネシア共産党

* 1947年5月1日メーデー大会でインドネシア労働者代表が英語で演説
* 1947年9月14日バンコクで国際民主青年大会 (the World Federation of
Democratic Youth) の大会7ヶ国の青年参加（タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、マ
ラヤ・・・）

⁴ Interview with Sanit Nari(b.1947) on 4 May 2003 in Sisaket.
⁵ Interview with Sanit Nari(b.1947) on 4 May 2003 in Sisaket

* 1947年東南アジア連盟の創立

* 1970年代後半、張遠(Wirat Angkathawon 1921-1997 北京で療養中死亡)が欧州在住のインドネシア共産党員たち12-13人を前に北タイラオス国境のナーン県で語った⁶タイ共産党小史 “An Internal History of the Communist Party of Thailand” Translated by Chris Baker In *Journal of Contemporary Asia* Vol.33 no.4(2003) pp.510-541.これがタイ共産党の唯一の党史、但し公式の党史に非ず (cf. p. 29、マラヤ共産党は正史あり)

中国文革の影響

文革期におけるタイ共産党内指導部の内紛、ナーン県と東北タイの二派があわや内ゲバ。(cf. p. 145) 1969年(北京に初めて地下鉄が開通した年)タイ共産党の4名の政治局員(ソン・ノッパクン(王斌)、ウィラット(張遠)、チャローン・ワンガム(陳嘉)、ダムリ)は北京からタイに戻る。党大会開催予定地のナーン県の根拠地でダムリは、ウィラット、チャローンを修正主義として逮捕する準備。察知してウィラットとチャローンは、東北タイに留まってナーンに来ず。党大会をベトナムで開催しようと計画、しかしホーチミン死亡して開催できず⁷。

中国との関係、中国から軍事顧問団、将校

1971年頃、北タイ・ナーン県のタイ共産党中央に3名の中国軍事顧問団(30人の中国からの護衛兵同伴)。1975-76年頃、中国はナーンのタイ人民解放軍の中に中共軍の将兵200人程度を派遣する。タイ兵士を訓練指揮するとともに、中国、ラオス、北タイ線の確保のため。ベトナムの東北タイ分離作戦に反対して⁸(cf. p. 62, 64)。一方、タイ政府は難民の国民党93師団の軍事組織を使って共産党軍と戦争(1981年2月7日 Khao Kho の決戦、「華僑国民党将兵16名」戦死の記念碑あり)。貢献度に応じて、タイ国籍、永住権などを与える。

* 噂では1968-70年時、タイの早期の解放のため中国から2-3大隊が北タイに駐屯、しかしうまく行かず。その後、山地民がCPT 武闘の基礎となる。北タイと東北タイは国境を越えて武器援助あり、ただし南タイは武器援助はなく、自力で政府軍から獲得した武器を使用⁹

* 中国、ベトナム、ラオス、カンボジアの関係がよかった1975-76年時は、中国からベトナム、ラオスを経て武器が容易に供給され、食料はラオス内で安全に生産できたので南イサーン地区の共産党は豊か¹⁰

中国からの援助資金の受け渡し

中国からの資金援助は、バンコクの華人ビジネスマンから共産党へ。中国の資金をタイ共産党に渡す仲介をする華人ビジネスマンがおり、これを党員の子ども(10代前半)が受け取り、バスケットの底に入れて定期バスで地方に運んだ。子どもに運ばせるのは、疑われないため。地方では高額の新札は疑われることがあった。バンコクで中国の資金をタイ共産党に渡す仲介をしていた華人は一部を着服して裕福になった者がいる。2000年代初頭、タイ共産党幹部がバンコクで苦しい生活に直面した時、カネを取り戻しに行こうという話が出た。(cf. p. 47, 64)

* 中国から資金援助が始まる前は、タイ共産党員は収入の10分の9を党に納入していた。しかし、中国からの資金援助が始まると却って党から月給が支給されるようになる¹¹。

タイ人民の声放送 (cf. p. 63)

1965年8月7日、タイ共産党武闘開始、1970年時がタイ共産党の最盛期(解放区の人口、200万人) (cf. p. 26)

中国で医療教育、中医としてバンコク郊外で大変流行る医師(cf. p. 64)
Interview with Sawai Malayawet(b.1914) on 15 Aug. 2002 in Bangkok.

1978年末ベトナム軍、カンボジア侵攻、1979年タイ人民の声放送(昆明、昆明にあった大量のタイ共産党資料失われる)停止。ラオス領内(ナーン県国境)からタイ共産党本部撤退。逃げ遅れたラオス内のタイ共産党幹部をラオスは逮捕監禁(その後逃亡してタイに戻った者や監禁中に死亡)

1980年末(年月日要確認)タイ共産党 Swit は Sang Phatthanothai に仲介を依頼して、タイ政府に統一戦線申し込み、但しタイ政府拒否¹²、プレーム政権の宥和政策一多くが投降、1981年2月7日ベッチャブーン県 Khao Kho の決戦、1982年第4届大会開催、残った幹部の大部分逮捕、1985年頃までに全ての部隊投降(cf. p. 28, pp. 145-151)

⁶ Interview with Somphon Angkathawon(wife of Wirat) on 10 Oct.2002 in Bangkok.

⁷ Interview with Sophon Phiwkhao in Tha Bo on 10 March 2005

⁸ Interview with Sophon Phiwkhao in Tha Bo on 10 March 2005

⁹ Interview with Rudi Rengchai on 18 Dec.1999 in Bangkok.

¹⁰ Interview with Samart Nari on 5 May 2003 in Sisaket

¹¹ Interview with Phrom Buranachon(b.1922) on 5 May 2003 in Ubol.

¹² Interview with Sang Phatthanothai in Bangkok on 23rd June 1981. (タイ語テープあり)

張遠(Wirat Angkathawon 1921-1997 北京で療養中死亡、陳平が見舞いにくる。

北京ではタイ、マラヤ、ビルマの共産党幹部の子弟と一緒に生活(ベトナム、ラオスは別)

13

共産党活動停止後、信心深いムスリムに (cf. p.?)

上座部仏教圏でも同様カンボジアのヌオン・チア、タイ人元共産党幹部(宗教に関心のある人が共産主義者になる傾向はないか?)

マラヤ共産党部隊が存在しなくなったタイ・マレーシア国境

マラヤ共産党は PULO(パタニー解放戦線、ムスリム過激派)抑圧に貢献があったが (p. 27, 78, 82)、マラヤ共産党撤退後のマレーシア国境ジャングル、ムスリム過激派の根拠地、2004年からゲリラ闘争開始。

タイ共産党、元タイ共産党員の現在

2001年6月反共法廃止

タクシン政権(2001.2.9-2006.9.19)における元タイ共産党員閣僚(1973.10.14-76.10.6 世代)

2009年4月事件、赤シャツ派は元タイ共産党員の市民運動家とタクシン派の共闘¹⁴

「赤シャツ派は、公式には「反独裁民主国民連合戦線」(タイ語は Nor.Por.Chor., 英語は National United Front of Democracy Against Dictatorships 即ち UDD) と称している。タイのテレビニュースは、「赤シャツグループ Klum khon sua daeng」、もしくは「Nor.Por.Chor.」と呼んでいる。」

「赤シャツ派の中核リーダーには、上記の「今日の真実」番組の常連から横滑りしたタクシン派演説家たちの他に、民主主義を擁護し軍事クーデターに反対する市民活動家リーダーであるウェーン・トーチラカーン医師やジャラン・ディターアピチャイ(ランシット大学元講師)らも存在する。この二人は、1970年代にタイ共産党に入党し、武力闘争の経験がある。70年代に学生運動に加わった経験を有する「10月の人」もしくは「10月世代」と言われる人々の一部、および1992年5月にスチンダー大将(軍人出身で選挙の洗礼を受けていない)の首相就任に反対して政権打倒運動に加わった人々の一部な

¹³ Interview with Sophon Phiwkhao in Tha Bo on 10 March 2005. 陳平の一番下の子チンサンとソーポンは北京からタイまで同道した。

¹⁴ 村嶋英治「タクシン支持赤シャツUDD派の大攻勢、パタヤーASEAN サミットの流会—2009年3月—4月のタイの大政争」、『タイ国情報』第43巻3号(2009年5月号)

どが、後者の基盤である。元タイ共産党の活動家を中心にして、今年の3月29日にはタイ国社会党の設立が発起された。これは、タイ共産党の復活とも、赤シャツ派の別働隊とも評されている。タクシン派の代議士や閣僚には、後述するように1976年10月6日事件前後にタイ国共産党の武力闘争に参加した人物も少ない。それ故、タクシンと元共産党活動家との組み合わせは珍しくはない。(この辺りが、反タクシンの指導者から、タクシンは一党独裁政治の共和制国家を計画したという事実無根?の批判を受ける理由であろう。)しかし、彼らの大部分は既に共産主義者ではなく、共産主義の理念とは無縁の生き方をしている。その中であって、比較的イデオロギー性が強く市民運動を続けてきたウェーン医師やジャランらが、赤シャツ派の中核リーダーの一角を占めている。これについては、社会改革の理念を堅持する元共産主義者たちが、タクシン派の運動を利用して宣伝活動をしているとも、逆に、タクシン派が社会改革派と協力して勢力拡大を図っているとも見られる。既存支配体制を打破し、社会経済改革を実施すべきという、タクシンの今回のビデオリンク演説のトーンは、元共産主義者たちの影響の現れと見ることもできるかもしれない。とにかく、タクシン派と元共産党活動家が今のところ相性がよいのは、共にタイ社会の多数派である低所得階層を基盤にして共通の敵と戦っているからであろう。」

「赤シャツ派中核リーダー中の元タイ共産党員

ウェーン・トーチラカーン医師には98~99年に、カセサート大学近くの彼のクリニックを訪ね、数度インタビューしたことがある。その話を以下紹介しよう。

彼は1951年にバンコクのサートン路で生まれた。彼の中学時代に亡くなった父は戦前に潮州からバンコクに来て、人糞の汲み取り人夫から身を起し商売で中流に上昇した。母は3歳の時に中国から来て、中国語タイ語ともに読めず、足は纏足で小さかった。少年時代の彼は、ピブーンの排華政策に完全に洗脳されて、中国人であることに引け目を感じていたので、中国の事象には無関心であった。5歳で小学校に入り、16歳で名門トリアムウドム高校を卒業し、直ちにマヒドン大学の医学部に入学。74年に6年生を卒業した。医学部を選んだのは、父親が病で早世したからである。

71年のタノームのクーデター以後、学生の軍事政権批判が強まり、社会主義傾向も出てきた。この少し前からタマサートの学生たち(後述のジャランの外、プリーディー・ブンスー、セクサンら)は安価な学生新聞を作ってマヒドン大学の正門前でも販売し始めた。彼らと仲間になり政治学、社会主義の勉強会を実施した。73年10月14日事件当時は、マヒドン大学学生自治会長兼タイ国医学生団体の書記長であり、医学生、獣医師、看護学生を率いて、逮捕された学生の釈放を求めるデモを行った。10月14日事件以後は農民や労働者の集会在頻発した。その集會に医学生や医師を派遣して農民労働者を診察した。74年に入ると学生活動家の暗殺が始まった。

75年に暗殺を逃れるため、セクサン、プリーディー、労働指導者のテートプーム・チャイディー(現在は黄シャツ派の活動家)らと共に、フランスに逃げ、パリの中国大使館

にタイ共産党と連絡を依頼した。連絡が取れるまで3ヶ月を要した。その後北京に行き、毛沢東思想を2ヶ月間学習したのち、南北統一直後のベトナムで3ヶ月間を過ごした。76年に北タイ・ナーン県のタイ共産党の根拠地に入った。この時点では未だ共産党入党を認められていなかった。77年に東北タイの共産党根拠地に医学校を作る責任者として派遣され、82年に投降するまで東北タイに留まった。92年5月事件では、91年2月クーデターの指導者スチンダー大将が首相に就任したことに抗議して、プラティープ・ウンソクタム・ハタ（彼女は今回の赤シャツ派の闘争にもリーダーの一人として参加）が、妊娠3-4ヶ月にも拘らず、ハンストを始めたのに刺激されて、運動に参加することになった。

共産党世代の次世代は、日本のポップカルチャーの影響にどっぷり浸かったようである。タイ国共産党の理論的指導者として1970年代半ばの大学生に圧倒的影響力があつたアヌット・アーパーピロム氏（1940年生）を、99年8月に自宅に訪ねたところ、子どもが日本製のゲームばかりして、と嘆いていたが、ウェーンのむすめもチュラーロンコーン大学の日本語学科に学び、優秀な成績で卒業後、現在は日本に留学して源氏物語を研究しているという。インタビュー時には、ウェーンも自分の世代は親の言うことは絶対であつたが、次世代は親の言うことを聞かないと嘆いていた。

ジャラン・ディターアピチャイは、1947年に南タイ、パッタランに生まれた。同地の高校を卒業後、67年から4年間タマサート大学政治学部で在学し、卒業した。大学入学直後から、様々な思想書を乱読するが、バンコクで地下活動していたタイ共産党員ソンボン・ユーナロンの影響下で共産党に接近。しかし正規の党員として認められたのは73年の10月14日事件以後である。それでも、70年代の大学生の活動家としては、タイ共産党入党した最初の世代であり、以後、バンコクでの地下活動に従事し、76年10月6日の弾圧以後はナーン県の根拠地に移動した。タイ共産党が1982年に開催した最後の党大会（第4回党大会）では中央委員会に次ぐ地区委員会（数県で構成）の委員に選出されたが、間もなく投降した。その後、フランスのパリ第7大学に留学し、歴史の修士号取得。1990年から10年間ランシット大学の講師、2001年から07年9月26日まで国の人権委員会委員。06年9月クーデター後、「独裁追放民主戦線」のリーダーの一人として軍事クーデターを批判したため、クーデター勢力が任じた任命議会によって人権委員会委員の職を解任された。彼は色黒で、いかにも南タイの地着きの人といった風貌である。15年ほど前、彼が大学講師時代に、日本の学術振興会の支援を得て日本の社会主義政党的の対外政策について研究のため来日した際に、筆者があなたは中国系ではないでしょう、と尋ねたところ、いや自分も中国人の子孫だと語っていた。」

「ブラーモート・ナーコンタップは、元タマサート大学教師で、73年10月14日事件当時には民主派のリーダーの一人であつた。タクシンが、1999年にフィンランドで元タイ共産党員と謀議して、王制を制限して一党独裁政治を実現し、最終的にはタイを共

産化するという計画を立てた（「フィンランド計画」）、というデマを、2006年5月17-24日にソンティが経営する『プーチャトカーン』紙に書いた。筆者が、彼と数度話した印象では、現実よりもどちらかという空想の世界に生きている御仁という感じである。」

「・・・「アマート（Ammat）」、「アマターヤティパタイ（Ammatayathipatai）」（「お上の政治」）という語彙である。

この語は、2008年7月くらいから、赤シャツ派の集会で、比較的過激な弁士が使用してきた単語である。例えば、08年7月18日のサナム・ルアンでの演説内容が不敬罪に当たると告発されたダーオ・トーピドウ（45歳女性、元新聞記者、魚雷の如く激しく演説するのでこのニックネームがついた）の同日の演説を、You Tube で聞くと、彼女の主張は、「アマート」（高官）と既存の資本家グループが結託してタクシンを政権から追放した、1932年立憲革命のプリーディーの理念に立ち戻れという内容である。09年2月9日にRed Siam Manifestoを宣言して、イギリスに逃れたチュラーロンコーン大学政治学部准教授チャイ・ウンパーコン（1953年10月生、タイ・英二重国籍、SOAS 修士後在英、97年チュラーロンコーン大学政治学部に就職）の主張は、ダーオ・トーピドウに比し、より根源的で、より過激だが、似たところもある。」

「タクシン自身の「アマターヤティパタイ」批判は、今回の闘争勝利のために、俄か仕込みの理論的武装に過ぎないと思われる。しかし、彼が自らを政権から追放した権力と闘おうとすれば、下積みの民衆（グラスルーツ）を基盤とするしかなく、グラスルーツにアピールするためには、赤シャツ派中の左派勢力、過激派の理論を借りる外なかったことも事実である。大衆的人気者のタクシンが、下積みの民衆に体制批判の火を付けた影響は、今後思わぬ副作用をもたらすかも知れない。」

「4月9日夜のビデオリンクでは、タクシンは、イッタボン・スパウォン空軍司令官（1952年1月生、2008年10月から現職）がタクシン派は共産主義者（コミニスト）だと発言したことを批判して、次のように述べた。この司令官はバカではないだろうか。今どき、世界中でどこに共産主義者がいるだろうか。中国も完全に資本主義だ。「アマート」（高官）は遅れている、古い考えのままだ。彼等は農民の声を全く軽視している、と。」

「4月27日には、次のような報道があつた。即ち、Phua Thai 党では今後の赤シャツ派の活動方針を転換して、タクシン一人のためではなく、また、王室に抵触するようなことは止め、真の民主主義を求める運動に方針を転換する、また、リーダーもタイラクトイ党の「10月世代」（1973-76年時に共産主義の影響を強く受けた学生世代）に変える、と。そこで名が挙げたのは次の人物である。

①チャトゥロン・チャーイセーン（Chaturong Chaisaeng）1956年生、チャチョンサオ県出身の華人、スワンクラブ校からチェンマイ大学医学部、同大学生自治会議長、4年生時に76年10月6日弾圧事件が生じ、共産党の武力闘争に参加。1977年10月から地下『アティパット』編集長（チョンティラー・インタビュー1999年8月25日）。投降

後、アメリカ留学、ニューヨーク州立大で経済学の修士号取得。博士課程在学中86年の総選挙に立候補のため帰国し民主党から当選。88年総選挙以降は新希望党所属で当選、96-97副蔵相、99-2001年新希望党幹事長、01年タイラクタイ党で当選。同党副党首、総理府大臣、02年法相続いて副首相。05年文相、06年9月19日クーデター後、タクシン党首に代って党首代行、07年5月30日タイラクタイ解党判決により5年間の公民権停止。

②プーミタム・ウェーチャチャイ。1953年生、チュラーロンコーン大学政治学部に入学し、クリアンカモン・ラオハパイロート、アネーク・ラオタマタットらと学生左派政党を結成し自治会執行部を獲得。1975年に同大卒業後も活動家、10月6日事件以後共産党の武力闘争に参加し79年投降。その後、農村開発のNGO活動、2001-06年タイラクタイ党副幹事長、03年交通大臣

③プロムミン・ロートスリヤデート元タクシン首相秘書官・元エネルギー相など。共産党の武装闘争に参加し、南イサーン地区で医師。」

文献①村嶋英治「タイ華僑の政治活動 — 5・30運動から日中戦争まで」、原不二夫編『東南アジア華僑と中国』1993年8月 アジア経済出版会 pp.263-364. Eiji Murashima 『Kanmuang Chin Sayam (タイ華僑の政治運動1924-1941年)』(タイ語)、チュラーロンコーン大学アジア研究所中国研究センター研究双書第一号、1996年2月、237ページ

文献②村嶋英治「1940年代におけるタイの植民地体制脱却化とインドシナの独立運動」磯辺啓三編『ベトナムとタイ、経済発展と地域協力』大明堂、1998年、pp.110-218. Eiji Murashima 'Opposing French Colonialism: Thailand and the Independence Movements in Indochina in the Early 1940s' South East Asia Research(SOAS), Vol.13 No.3(Nov.2005)pp.333-383.

文献③村嶋英治「第二次世界大戦期間の日泰同盟及泰国華僑」(中国語)、『アジア太平洋討究』第7号、2005年5月 pp.27-59., Eiji Murashima "The Thai-Japanese Alliance and the Chinese of Thailand", Paul Kratoska ed. *Southeast Asian Minorities in the Wartime Japanese*, Cruzon. 2002, Eiji Murashima 「Samphanthamit Thai-jipun kap Chaochin nai prathetthai samai songkhram lok khrang thi 2 (第二次大戦期の日タイ同盟と在タイ華僑)」, Hayao Fukui, Charnvit Kasetsiri eds, *Japanese Scholarship on Thailand and Southeast Asia* (タイ語)、1998年1月刊、pp.111-200. (「日タイ同盟とタイ華僑」のタイ語版『イーブン・タイ・ウッサーカネー』)、村嶋英治「日タイ同盟とタイ華僑」『アジア太平洋研究』(成蹊大学アジア太平洋研究センター) No.13, 1996年1月、pp.45-73.

文献④村嶋英治「カンボジア共産党ナンバー・ツー、ヌオン・チア(Nuon Chea)のバンコク時代(1942年-1950年)」、『アジア太平洋討究』第11号、2008年10

月、pp.85-121. Eiji Murashima "The Young Nuon Chea in Bangkok(1942-1950) and the Communist Party of Thailand: The Life in Bangkok of the Man Who Became "Brother No.2" in the Khmer Rouge", *Journal of Asia-Pacific Studies*(『アジア太平洋討究』)No.12, March 2009, pp.1-42.